

聖書の英語の研究

寺澤 芳雄

Yoshio Terasawa

研究社

まえがき

“England became the people of a book, and that book was the Bible” (英国は一冊の書物を読む国民となった。その書物とは聖書であった) という有名なことばがある。これは従来の英国史が英国の国王(女王)の政治や領土征服の歴史を記録することを主眼としたのに対して、英国国民の歴史を記録することを意図した歴史家 J. R. Green の名著 *A Short History of the English People* (1874) の第 8 章冒頭に記された至言である。

それ自体が絶対的な権威をもつとされたラテン語聖書 (Vulgata, the Vulgate) に対して、これを自国語に訳す者は Tyndale のように殉教の悲運にあうという、今日ではおよそ信じがたいことが公然と行なわれた時代はついに幕をおろしたのである。すなわち、1535 年出版の Coverdale's Bible 以降は、Matthew Bible (1537), The Great Bible (1539), The Bishops' Bible (1568) が公認出版され、数種の改訳・新約が現われるに至った。この間、小型の簡便な英訳聖書としてひろく歓迎された Geneva Bible (1560) も出現した。教会の権威主義を真向から批判した Geneva Bible に対しては、カトリック教会でも Vulgata からの英訳・出版で応じざるをえなくなった。このような活発な聖書英訳の機運の中で、1611 年には AV (KJB) が “the Noblest Monument of English Prose” (英語散文の金字塔) として誕生したのである。このようにして、16 世紀後半には、日曜の礼拝ごとに、説教壇に設置された聖書を仰ぎ、その朗読を聞くのが一般信徒の大きな喜びとなった。その結果として、見るからに荘重な大判の聖書の出版が競われることになったのは当然であろう。

従来、英語史や英米文化史で、AV は Shakespeare と共に、近代における英語散文の伝統を形成・確立したといわれてきた。この評価は今日も変わらず、聖書からの引用も AV から行なわれるのが一般である。AV の訳文はつねにとは言えないが、名訳の誉に値する場合が少なくない。例えば「雅歌」の 2:11-12 の

For lo, the winter is past, the rain is over, *and* gone.

The flowers appear on the earth, the time of the singing of *birds* is come,

and the voice of the turtle is heard in our land.

などは、ヘブライ語原文の質の高さに負うところも多いが、耳に快く響き、厳しい冬の後のおだやかな春の到来を謳歌するイメージ豊かな名訳を代表するものであろう。

また、現代英語の慣用表現には AV に由来する(多くは Tyndale 訳に遡る)ものも多く、文学作品をはじめ書物のタイトルに AV 訳が用いられることは、序章にも論じているように枚挙にいとまがない。二、三の例をあげれば、Ernest Hemingway, *The Sun Also Rises* (日はまた昇る, 1926) (*Eccles.* 1:5), Elizabeth Bowen, *The Heat of the Day* (日ざかり, 1948) (*Matt.* 20:12) など。また、米国のフォーク・デュオ Simon & Garfunkel 最初期のヒット曲で米国映画 *The Graduate* (『卒業』, 1967) の挿入歌としても知られる ‘The Sound of Silence’ (1965) は *1 Kgs.* 19:12 の a still small voice 「静かなる細き声」(内なる良心の声) を連想させる。米国生まれの英語・英文学者 Logan Pearsall Smith は、その著書 *Words and Idioms* (1925) の中で、by the sweat of one’s brow (*Gen.* 3:19) 「額に汗して」、the valley of the shadow of death (*P.s.* 23:4) 「死の蔭の谷」、the root of evil (*1 Tim.* 6:10) 「諸悪の根源」など約 170 の聖書起源の慣用表現をあげている。

AV はその出版後 400 年余りを経た今日でも、英米を中心とする英語圏の人々の間で愛誦されているが、本書は AV の魅力を解き明かすことに焦点を当てた。とくに、その言語と文体、語彙の特色を詳しく論じたつもりである。Shakespeare の言語・文体については、多くの研究が年々積み重ねられてきたのに比べると、AV の言語・文体についてまとまった研究に乏しかったのは何故であろうか。本書が AV の言語研究に多少とも貢献することができたとすれば、著者の望外の喜びである。

寺澤 芳雄

* 本書が主な研究対象とする英訳聖書は従来わが国の英文学史・英語史関係では Authorized Version 『欽定英訳聖書』とよばれることが多く、筆者も長くこの呼称を用いてきたが、当初から King James (’) Bible (KJB) が正式なタイトルであり、Authorized Version (AV) は(主として英国における)通称・別称である。米国では早くから KJB が用いられていたが、最近では英国でも KJB が一般的。 *Historical Catalogue* (1968) には *The editio princeps of King James’ Bible, commonly known as the ‘Authorised’ version* と記されている。

目 次

まえがき	iii
英訳聖書略称一覧	vi
聖書書名対照表	vii
第1章 序論：英語聖書と英語文化	1
第2章 AVの成立(書誌学的・文献学的解説)	9
第3章 AV諸版の異同比較(‘He’/‘She’ Bible; 19世紀末までの諸版(抜粋))	33
第4章 アメリカにおけるAVの受容(Webster Bibleを中心に)	83
第5章 AVの言語の特徴	103
• 聖書の英語とは何か(103) 古語法(105) 発音(107) 冠詞(108) 名詞(109) 代名詞(111) 関係代名詞(115) 形容詞(121) 動詞(125) 仮定法(141) 助動詞(146) 副詞(150) 前置詞(152) 接続詞(153) 語順(155)	
• 英語聖書の文体と修辞：簡樸性(164) 具象性・比喩(169) 反復・併行体(172)	
第6章 AV要語集	181
第7章 主要英訳聖書年表	229
参考文献書目	237
索引	245
あとがき	249
図版： 1 AV初版(1611)の総題扉	
2 AV初版の「創世記」第1ページ	
3 AV初版(ローマン体翻刻版)の「創世記」第1ページ	

英訳聖書略称一覧

本書中で引用した英訳聖書略称のリスト。記載順序は、略称—出版年—書名。詳しくは第7章の年表を参照。

AV	1611	Authorized Version. King James Bible(略 KJB)ともいう。
RV	1881–85	Revised Version (AV の改訳)。
RSV	1946–52	Revised Standard Version (⇒ NRSV 1990)。
NEB	1961–70	New English Bible (⇒ REB 1989)。
GNB	1966–76	Good News Bible. 改訂版 1992(米), 1994(英)。
NAB	1970	New American Bible. 改訂版 1986, 1991。
NIV	1973–78	New International Version.
NJB	1985	New Jerusalem Bible (Jerusalem Bible (1966, 略 JB) の改訳)。
REB	1989	Revised English Bible (NEB の改訳)。
NRSV	1990	New Revised Standard Version (RSV の改訳)。
CEV	1995	Contemporary English Version. 新約は 1991 年。
Message	2002	Message: The Bible in Contemporary Language. 新約は 1993 年。

聖書書名対照表

(1) 旧約聖書

書名(文語訳)	書名(新共同訳)	略記(日)	略記(英)	書名(英)
創世記	創世記	創世	Gen.	Genesis
出エジプト記	出エジプト記	出エジプト	Exod.	Exodus
レビ記	レビ記	レビ	Lev.	Leviticus
民数記略	民数記	民数	Num.	Numbers
申命記	申命記	申命	Deut.	Deuteronomy
ヨシュア記	ヨシュア記	ヨシュア	Josh.	Joshua
士師記	士師記	士師	Judg.	Judges
ルツ記	ルツ記	ルツ	Ruth	Ruth
サムエル前書	サムエル記上	サムエル上	1 Sam.	1 Samuel
サムエル後書	サムエル記下	サムエル下	2 Sam.	2 Samuel
列王紀略上	列王記上	列王上	1 Kgs.	1 Kings
列王紀略下	列王記下	列王下	2 Kgs.	2 Kings
歴代志略上	歴代誌上	歴代上	1 Chr.	1 Chronicles
歴代志略下	歴代誌下	歴代下	2 Chr.	2 Chronicles
エズラ書	エズラ記	エズラ	Ezra	Ezra
ネヘミヤ記	ネヘミヤ記	ネヘミヤ	Neh.	Nehemiah
エステル書	エステル記	エステル	Esth.	Esther
ヨブ記	ヨブ記	ヨブ	Job	Job
詩篇	詩編	詩篇	Ps.	Psalms
箴言	箴言	箴言	Prov.	Proverbs
伝道之書	コヘレトの言葉	コヘレト(伝道)	Eccles.	Ecclesiastes
雅歌	雅歌	雅歌	S. of S.	Song of Solomon
イザヤ書	イザヤ書	イザヤ	Isa.	Isaiah
エレミヤ記	エレミヤ書	エレミヤ	Jer.	Jeremiah
エレミヤ哀歌	哀歌	哀歌	Lam.	Lamentations
エゼキエル書	エゼキエル書	エゼキエル	Ezek.	Ezekiel
ダニエル書	ダニエル書	ダニエル	Dan.	Daniel
ホセア書	ホセア書	ホセア	Hos.	Hosea
ヨエル書	ヨエル書	ヨエル	Joel	Joel
アモス書	アモス書	アモス	Amos	Amos
オバデヤ書	オバデヤ書	オバデヤ	Obad.	Obadiah
ヨナ書	ヨナ書	ヨナ	Jonah	Jonah
ミカ書	ミカ書	ミカ	Mic.	Micah
ナホム書	ナホム書	ナホム	Nah.	Nahum
ハバクク書	ハバクク書	ハバクク	Hab.	Habakkuk
ゼバニヤ書	ゼファニヤ書	ゼファニヤ	Zeph.	Zephaniah
ハガイ書	ハガイ書	ハガイ	Hagg.	Haggai
ゼカリヤ書	ゼカリヤ書	ゼカリヤ	Zech.	Zechariah
マラキ書	マラキ書	マラキ	Mal.	Malachi

(2) 新約聖書

書名(文語訳)	書名(新共同訳)	略記(日)	略記(英)	書名(英)
マタイ伝福音書	マタイによる福音書	マタイ	Matt.	Matthew
マルコ伝福音書	マルコによる福音書	マルコ	Mark	Mark
ルカ伝福音書	ルカによる福音書	ルカ	Luke	Luke
ヨハネ伝福音書	ヨハネによる福音書	ヨハネ	John	John
使徒行伝	使徒言行録	使徒	Acts	The Acts
ローマ人への書	ローマの信徒への手紙	ローマ(ロマ)	Rom.	Romans
コリント人への前の書	コリントの信徒への手紙一	1 コリント	1 Cor.	1 Corinthians
コリント人への後の書	コリントの信徒への手紙二	2 コリント	2 Cor.	2 Corinthians
ガラテヤ人への書	ガラテヤの信徒への手紙	ガラテヤ	Gal.	Galatians
エペソ人への書	エフェソの信徒への手紙	エフェソ	Eph.	Ephesians
ピリピ人への書	フィリピの信徒への手紙	フィリピ	Phil.	Philippians
コロサイ人への書	コロサイの信徒への手紙	コロサイ	Col.	Colossians
テサロニケ人への前の書	テサロニケの信徒への手紙一	1 テサロニケ	1 Thess.	1 Thessalonians
テサロニケ人への後の書	テサロニケの信徒への手紙二	2 テサロニケ	2 Thess.	2 Thessalonians
テモテへの前の書	テモテへの手紙一	1 テモテ	1 Tim.	1 Timothy
テモテへの後の書	テモテへの手紙二	2 テモテ	2 Tim.	2 Timothy
テトスへの書	テトスへの手紙	テトス	Titus	Titus
ピレモンへの書	フィレモンへの手紙	フィレモン	Philem.	Philemon
ヘブル人への書	ヘブライ人への手紙	ヘブライ	Heb.	Hebrews
ヤコブの書	ヤコブの手紙	ヤコブ	Jam.	James
ペテロの前の書	ペトロの手紙一	1 ペテロ	1 Pet.	1 Peter
ペテロの後の書	ペトロの手紙二	2 ペテロ	2 Pet.	2 Peter
ヨハネの第一の書	ヨハネの手紙一	1 ヨハネ	1 John	1 John
ヨハネの第二の書	ヨハネの手紙二	2 ヨハネ	2 John	2 John
ヨハネの第三の書	ヨハネの手紙三	3 ヨハネ	3 John	3 John
ユダの書	ユダの手紙	ユダ	Jude	Jude
ヨハネの黙示録	ヨハネの黙示録	黙示	Rev.	Revelation

(3) アルファベット順

(旧約聖書)

Amos	アモス	Judg.	士師
1 Chr.	歴代上	1 Kgs.	列王上
2 Chr.	歴代下	2 Kgs.	列王下
Dan.	ダニエル	Lam.	哀歌
Deut.	申命	Lev.	レビ
Eccles.	コヘレト (伝道)	Mal.	マラキ
Esth.	エステル	Mic.	ミカ
Exod.	出エジプト	Nah.	ナホム
Ezek.	エゼキエル	Neh.	ネヘミヤ
Ezra	エズラ	Num.	民数
Gen.	創世	Obad.	オバデア
Hab.	ハバクク	Prov.	箴言
Hag.	ハガイ	Ps.	詩篇
Hos.	ホセア	Ruth	ルツ
Isa.	イザヤ	S. of S.	雅歌
Jer.	エレミヤ	1 Sam.	サムエル上
Job	ヨブ	2 Sam.	サムエル下
Joel	ヨエル	Zech.	ゼカリヤ
Jonah	ヨナ	Zeph.	ゼファニヤ
Josh.	ヨシユア		

(新約聖書)

Acts	使徒	Mark	マルコ
Col.	コロサイ	Matt.	マタイ
1 Cor.	1 コリント	1 Pet.	1 ペテロ
2 Cor.	2 コリント	2 Pet.	2 ペテロ
Eph.	エフェソ	Phil.	フィリピ
Gal.	ガラテヤ	Philem.	フィレモン
Heb.	ヘブライ	Rev.	黙示
Jam.	ヤコブ	Rom.	ローマ (ロマ)
John	ヨハネ	1 Thess.	1 テサロニケ
1 John	1 ヨハネ	2 Thess.	2 テサロニケ
2 John	2 ヨハネ	1 Tim.	1 テモテ
3 John	3 ヨハネ	2 Tim.	2 テモテ
Jude	ユダ	Titus	テトス
Luke	ルカ		

(4) (経) 外典 Apocrypha

AV	略記 (英)	新共同訳
1 Esdras	1 Esd.	エズラ記 (ギリシア語)
2 Esdras	2 Esd.	エズラ記 (ラテン語)
Tobit	Tobit	トビト記
Judith	Judith	ユディト記
Esther	Esth.	エステル記
Wisdom of Solomon	Wisd.	知恵の書
Wisdom of Iesus the son of Sirach or Ecclesiasticus	Ecclus. (= Sir.)	シラ書 (集会の書)
Baruch	Baruch	バルク書
The Song of the Three Holy Children	S. of III Ch.	アザルヤの祈りと三人の若者の讃歌
Susanna	Sus.	スザンナ
Bel and the Dragon	Bel and Dr.	ベルと竜
The Prayer of Manasses	Pr. of Man.	マナセの祈り
1 Maccabees	1 Macc.	マカバイ記一
2 Maccabees	2 Macc.	マカバイ記二

第 1 章

序論：英語聖書と英語文化

England became the people of a book, and that book was the Bible.

(英国は一冊の書物を読む国民となった。その書物とは聖書であった。)

この言葉は 19 世紀の英国の歴史家グリーン (J. R. Green) の名著 *A Short History of the English People* (『英国民略史』1874, 改訂版 1883) の第 8 章に述べられているものである。英語の聖書といえ、20 世紀の間に新訳が相次いで出版されており、部分訳その他を含めれば 1,000 種を優に超えるともいわれる。しかし、英訳聖書としてはまず第一に 400 年後の今日でも名訳として今なお多くの人々に愛誦されている古典的な 1611 年出版の欽定英訳聖書 (Authorized Version: 略称 AV) をあげなければならない。これは米国ではふつう、また最近では英国でも King James Bible (略称 KJB) とよばれることが多い。この AV はシェイクスピア (William Shakespeare, 1564–1616) と並んで近代英語の性格を決定し、その刊行以来、今日に至る 4 世紀に及ぶ期間にわたって、英米人の精神・思想・感情生活を育み、また慣用表現の一部として日常英語にも欠くことのできない要素となってきた。そのことは今日最大・最良の英語辞典といわれる *Oxford English Dictionary* (略称 OED: 1928, 第 2 版 1989) で最も多く引用された作家はシェイクスピア (約 33,300 例) だが、最多の作品としては AV を主とする英語聖書 (約 25,000 例) であることから明らかであろう。英米出版の大型引用句辞典でも、引用句数は Bible (AV) が第 1 位、シェイクスピアが第 2 位というのがふつうである。たしかに英米においても、今日では教会に通うキリスト教信者の数がとみに減少していることは否定できないが、20 世紀半ばごろまでは英米の家庭の 70–80% には少なくとも聖書が一冊は備えられていたという事実は、読まれざるベストセラーの恐れはあるとしても、英米人の生活と聖書との関わりりの深さを示すものであろう。またその意味で英米の文化に関心をもつ読者にとって AV は、400 年を超えた今日においても、英語文化の基礎資料としての魅力・重要性を失っ

ていない。

そこでまず、聖書と欧米人の生活との関係について少し例をあげてみよう。中世・ルネッサンス以来、文学のほか絵画・彫刻などの美術あるいは音楽に聖書から数多くの題材がとられていることは言うまでもない。絵画・彫刻ではダヴィンチ(Leonardo da Vinci)の『最後の晩餐』(?1495)をはじめとしてミケランジェロ(Michelangelo)の『ダビデ像』(1501)、ミレー(J.-F. Millet)の『落穂拾い』(1857)など無数と言ってよく、最近の画家ではシャガール(Marc Chagall, 1887-1985)も聖書に基づく多くの画を残している。映画では『十戒』(*The Ten Commandments*, 1925, 1956)や『サムソンとデリラ』(*Samson and Delilah*, 1949), 『ジーザス・クライスト・スーパースター』(*Jesus Christ Superstar*, 1973: イエスの最後の1週間に基づくロックミュージカル(1971)の映画版), 『最後の誘惑』(*The Last Temptation of Christ*, 1988)あるいは『パッション(キリストの受難)』(*The Passion of Christ*, 2004)などのように、聖書に取材したものがまればなく、邦画『復讐するは我にあり』のタイトルも聖書(「ローマ」12:19)によっている。音楽においても『受難曲』『メサイア』を始めとしたオラトリオや、オペラではサンサーンス(Camille Saint-Saëns)の『サムソンとダリラ』(*Samson et Dalila*, 1877), マスネ(Jules Massenet)の『ヘロデ』(*Hérodiade*, 1881), またバレエではプロコフィエフ(Sergei Prokofiev)の『放蕩息子』(*Prodigal Son*, 1928)などがよく知られている。英米人の命名についても Christian name ということからも明らかなように、時代により流行の差は大きい。女性名 Mary, Elizabeth, Rebecca, 男性名 John, Michael, James, Daniel など、聖書中の人物や聖徒名にちなむものが多い。また公の場で発言する際の宣誓について swear by [on] the Bible という表現があり、実際そのような儀式(左手を聖書の上におき右手を挙げる)が行われていることも、米国大統領オバマ(Barack Obama)の就任式(2009年1月20日)を通じて、よく知られたところであろう。オバマが宣誓に用いた聖書は、その私淑して止まない第16代大統領リンカーン(Abraham Lincoln)が用いた聖書(AV)であったという。米国の大統領には聖書からの引用を好む者が多く、アイゼンハワー(Dwight Eisenhower), カーター(Jimmy Carter), レーガン(Ronald Reagan), ブッシュ(George Bush, Sr), さらに最近のオバマなど就任演説でしばしば言及されている。レーガンに至っては1983年を“The Year of the Bible”とし、多くの社会・政治問題について、聖書のことばに自ら耳を傾けるべきことを強調している。あるいはまた、従来我々日本

第1章 英語聖書と英語文化

人の間では何か人に仕事を頼まれたとき、報酬のことを予めはっきり口にするのをはばかりの傾向があったが、英米人などの間ではまず最初に報酬のことをきちんと明らかにするようである。ただし、最近では日本の社会習慣も変わってきたようであるが、このような習慣の違いの背後には「働きの酬いを得るはふさわしきなり」(「ルカ」10:7)という聖書の言葉があり、我々の処世観の背後には儒教的慎みがあったのではないと思われる。

次に視点を変えて、英語の表現・文体についていう‘coloured’ English という点から少し考えてみたい。ここで‘coloured’ English(文飾英語)というのは日常的なふつうの表現 simple ‘colourless’ English に対して、何らかの連想を伴った暗示力のある表現を意味している。そしてその‘色づけ’(colouring)には Mother Goose, Nursery Rhymes とよばれるわらべ歌や諺・格言あるいはシェイクスピアを始めとする文学作品からの引用が用いられることが多い。例えば、日本でもよく知られたミュージカルの一つ『マイ・フェア・レディ』(My Fair Lady, 1956)は英国の作家ショー(G. B. Shaw)の戯曲『ピグマリオン』(Pygmalion, 1913 初演, 1916 出版)を脚色したものだが、このミュージカルの題名は、英米人なら誰でも知っているわらべ歌の最後のリフレインを連想させる。(次の第1-2行はエリオット(T. S. Eliot)の*The Waste Land*(『荒地』1922)426行に引用されている。)

London Bridge is falling down,	ロンドン橋が落ちる
Falling down, falling down,	落ちる, 落ちる
London Bridge is falling down,	ロンドン橋が落ちる
My fair lady.	マイ フェア レディ

とすれば、ヒギンズ(Higgins)教授の音声学の実験台としてロンドンの下町の花売り娘から貴婦人に仕立てられた犠牲^{いけにえ}のイライザ(Eliza)に対して、このわらべ歌の背後にひそむ暗く恐ろしい人柱の儀式という古い記憶、つまり橋を押し流すほどに荒れて氾濫する川の霊を鎮めるための、my fair lady という^{ひとみ}^{ごころ}人身御供についての古い記憶が人によっては連想されるかもしれない。日本でも昔は川が氾濫して橋が流されたりした時、若い娘を人身御供に捧げる恐ろしい習慣があったことが思い合わされるであろう。ただし、これに対してこの題名は Mayfair lady の /ei/ を /ai/ と発音するコックニー訛り (/máirfeə lárdi/) とする説がある。つまり My Fair Lady はオックスフォード通りとピカ

ディリー通りの間に挟まれた高級地区メイフェア (Mayfair) によく見られるような貴婦人を指すというのである。

このミュージカルの中でイライザはヒギンズ教授から特訓を受け、繰り返し ‘The rain in Spain stays mainly in the plain’ (スペインでは雨は通例平野に降り続ける: 上記のとおりコックニーでは /ei/ を /ai/ と発音) という文を発音させられる。ちなみにヒギンズはオックスフォード大学の音声学・英文法学者で ‘Bitter’ Sweet (bitter 「苦い, 苦虫をつぶしたような」とあだ名されたスウィート (Henry Sweet) がモデルと考えられてきたが、最近ではショートと親交のあったロンドン大学の音声学教授ジョーンズ (Daniel Jones) が有力とする説もある。

また If you frequently change your job, you will not succeed in life. (職業を変えてばかりいると成功しない) という代わりに、A rolling stone gathers no moss. (転石苔むさず [苔を生ぜず]) という諺を用いたとすれば、そこには何らかのニュアンスが加わるであろう。この場合の stone は本来 rolling stone (地ならし用の筒型をしたローラー) の意である。ちなみに、この諺のもとの意味は「職業や住所などを転々と変える者にはお金がたまらない」ということだが、スコットランドや米国ではしばしば「常に活動している人ははつらつとして沈滞することがない」という積極的な意味で用いられることが多い。ミック・ジャガー (‘Mick’ Jagger) 率いるロックバンド The Rolling Stones (1962年結成) の名称もこの諺にちなむのであろうか。この米国の用法には、地域的・社会的移動柔軟性 (geographical and social mobility) を特色とする米国社会の一面が反映していると言えよう。

さらにまた There’s a time for everything. (何事にも時機ということがある) という代わりに、There is a tide in the affairs of men. (この世のことには汐時というものがある) というとなれば、これはシェイクスピアの『ジュリアス・シーザー』 (Julius Caesar, 1599) の4幕3場からの引用であり、ブルータス (Brutus) が自らの運命を覚悟してキャッシアス (Cassius) に向かっていう、あの印象的な場面と重苦しい雰囲気が連想されて、人生の悲哀が漂うことであろう。また同じような意味で、To every thing there is a season. とか Time and chance happeneth (=happens) to all. といえ、それは聖書の「伝道の手紙(コヘレトの言葉)」3:1, 9:11 による表現であり、人は才能よりも運に左右されるという、やや諦観的^{ていかん}・厭世的^{えんせい}な響きが伴うかもしれない。日本語で‘人間万事塞翁が馬’あるいは‘禍福は糾^{あざな}える縄のごとし’といえ、またこれとやや

第1章 英語聖書と英語文化

異なり、運・不運は紙一重、運は天にまかせると悟ったような含意があるであろう。そのほか聖書に由来する英語の諺・引用句には、Man shall not live by bread alone. 「人の生くるはパンのみによるにあらず」（「マタイ」4:4）、The spirit is willing but the flesh is weak. 「心は熱すれども肉体は弱し」（「マタイ」26:41）、Pride goes before a fall. 「^{たかぶり}驕傲は滅び[没落]に先立つ」（「箴言」16:18）など、一般の諺辞典に収録されているものが多数ある。

‘Coloured’ English にはこのように聖書によるものが非常に多く認められる。例を続ければ、「昨夜無事帰宅した」という意味で She got home safely last night. という代わりに She got home *safe and sound* last night. ということがある。語頭に同一音 /s/ を重ねたこの safe and sound (^{つが}恙なく無事で) という慣用句は、とくに長い旅や探検あるいは試練や戦争などから戻った場合に用いられることが多い。それは、この慣用句が一般化したのは、AV の放蕩息子 (Prodigal Son) の^{たと}譬え話(「ルカ」15章)に基づくものだからである(ちなみに、Prodigal Son ということばは AV 本文では用いられておらず、現行流布版では省かれている章の冒頭と上段欄外の見出しにみられる)。家出して放蕩三昧をしたあげく無一文となり、世間の手のひらを返すような冷たさ厳しさにあった弟息子は、そのときはじめて目が覚め、非を悔いて父親のもとに帰ってくる。その息子を暖かく出迎える父親について

He [=the father] hath received him safe and sound.

とあるのによっているからである。

これと同じ放蕩息子の譬え話に由来するものに、kill the fatted calf (‘肥えた’子牛)は現代英語ではふつう ‘fattened’ calf 「最高のもてなしで歓待する、大盤振るまいをする」があるが、これは父親がよく肥えた子牛を殺して放蕩息子の帰りを歓待したことにちなむ。このような聖書由来の慣用表現は容易に列挙することができる。米国生まれの英語・英文学者スミス (Logan Pearsall Smith) はその著書 *Words and Idioms* (1925) の中の英語の慣用句を論じた章で by the sweat of one’s brow 「額に汗して：原語のヘブライ語を直訳すれば「鼻に汗して」」（「創世」3:19）、the valley of the shadow of death 「死の蔭の谷(瀕死の状態、災難の兆し）」（「詩篇」23:4）、the root of all evil 「もろもろの悪しき事の根(諸悪の根源；富の誘惑と罟）」（「1テモテ」6:10）など170ほどの聖書起源の慣用表現をリストにしている。「諸悪の根源」が聖書由来の慣用表現と聞いて意外に思う読者もいるかもしれない。

また、英米文学の作品の題名がしばしば聖書、とくに AV から採られていることも読者は思い合わされるであろう。「創世」4:1-16 のカインとアベル (Cain and Abel) の話からは、人間の原罪と救いの可能性をテーマとしたスタインベック (John Steinbeck) の *East of Eden* (『エデンの東』1952) が、「空の空、空の空なるかな、すべて空なり」で始まる「伝道の書(コヘレトの言葉)」からは、第一次大戦後の Lost Generation (失われた世代) に焦点を当てたヘミングウェイ (Ernest Hemingway) の *The Sun Also Rises* (『日はまた昇る』1926)、「箴言」9:1 からは、ローレンス (T. E. Lawrence) による第一次大戦中のアラビアにおける回想記 *The Seven Pillars of Wisdom* (『知恵の七柱』1926) などが、また「主の祈り」(「マタイ」6:9-13) からは、「whisky-priest」とよばれる呑んだくれの破戒僧の死を通して人間の救いの可能性を問うたグレアム・グリーン (Graham Greene) の *The Power and the Glory* (『ちからとまかえ』1940) などの題名が採られている。ちなみに英国生まれの米国の劇作家・小説家ヴァン・ドルーテン (John Van Druten) の代表作に *The Voice of the Turtle* (1943) というロマンティックな喜劇があり、映画化(1947)もされたが、戦後これを日本に紹介した文章の中で、映画の題名を「海亀の声」としてあるのを見たことがある。しかし、これは旧約聖書の中でも最も文学的香りの高い「雅歌」(*Song of Songs*) の、その雅歌の中でもまた最も美しい表現の一つに数えられる、次の求愛のことばの一節によっているのである。そして、ここでは lo を除き用語は ‘simple and plain’ であることにも注意したい。

lo, the winter is past, the rain is over, and gone. The flowers appear on the earth, the time of the singing of birds is come, and the voice of the turtle is heard in our land. (2:11-12) (視よ、冬すでに過ぎ、雨もやみて、はやさりぬ。もろもろの花は地にあらわれ、鳥のさえずる時すでに至り、斑鳩やまほととの声われらの地にきこゆ。)

それでこそ、週末の休暇を楽しむ一人の兵士と若い女優との愛のロマンスの題とするにふさわしい。

ここで参考までに、「雅歌」のこの箇所に対する代表的英訳聖書 NRSV、REB と米国で若い読者層に取り付き易いと歓迎されている GNB² の訳文を引用しておこう。

¹¹ For see, winter is past,

第1章 英語聖書と英語文化

the rains are over and gone.

¹² 'Flowers are appearing on the earth.

The season of glad songs has come,
the cooing of the turtledove is heard (NRSV)

¹¹ "For see, the winter is past,
the rains are over and gone.

¹² The flowers appear on the earth,
the time of pruning the vines has come,
and the song of the dove is heard in our land. (REB)

¹¹ The winter is over; the rains have stopped;

¹² in the countryside the flowers are in bloom.

This is the time for singing;
the song of doves is heard in the fields. (GNB)

これらの現代英語訳では、説明に落ちてAV(以来)の詩的香りを失っていることは歴然としている。NRSVがあえてthe turtleをthe turtledoveとしたのは、聖書になじみの薄い最近の若い読者層を意識したものであろう。

やや分かりにくい例を加えれば、英国の作家ウィルソン(A. N. Wilson)の小説に*A Bottle in the Smoke*(『煙の中の草袋[酒壺]』1990)があるが、これは「詩篇」119:83からで「役立つもの」の意であり、また同じく英国の作家コールゲイト(Isabel Colegate)が隠者・世捨て人を描いた小説*A Pelican in the Wilderness*(『荒野のペリカン』2002)も「詩篇」102:6の「荒れたる跡のふくろう梟」によっている。この'pelican'の原語の解釈には問題があり、最近の訳では'(desert-)owl'「(砂漠の)梟」としているものが多いが、GNB²ではa wild bird in the desert.

このようにみえてくると、英語文化はすぐれて'引用の文化'(quotation culture / the culture of quotations)といえるのではないか。たしかに、英米人の会話・スピーチ・書物には聖書に限らず、諺や文学作品あるいは哲学書などからの引用が多い。英米の新聞・雑誌などにも、ひと月の間に何回かは聖書に由来する見出し(headline)が見られ、日常性の中での引用が特徴的である。それに比べると太田道灌の古事の例などは知らず、今日の日本語文化は、本

来の意味での生活に根ざした‘引用の文化’とはいえないのではないかと思う。そのことは、英米には詩・小説などの文学作品に限らず、あらゆる分野の書物あるいはスピーチなどからの引用句を収録した 夥^{おびただ}しい引用句辞典が年々歳々繰り返し出版されているのに対して、日本では万葉集を始めとする和歌・俳句などに限定した索引辞典は別として、網羅的な本格的引用句辞典があまり見られないという事実からもいえよう。英語の引用についてもう一つ例をあげよう。1995年4月19日米国オクラホマシティの連邦ビル爆弾テロで168名の命を奪った殺人犯マックヴェー(Timothy McVeigh)の処刑が2001年6月11日に、被害者の関係者や報道陣がなまの映像を通じて見守る中で行われたというショッキングな報道を覚えている方もおられることと思う。聞くところでは処刑前に最後のことばを求められたとき、マックヴェーは無言のまま次のような詩の一節を認^{したた}めて刑務官に差し出したという(享年33歳)。

I am the master of my fate: 我はわが運命の支配者,
I am the captain of my soul. 我はわが魂の船長(舵取り)。

これはヴィクトリア朝の英国詩人・劇作家・批評家で、俗語辞典の編纂者でもあったヘンリー(W. E. Henley)の *Invictus* (「不撓不屈の心」1875) という詩からの引用である。このような場合に、このような犯罪者が、このような詩を(いつ、どこで、どのようにして覚えたのかは別にしても)引用したということに、欧米の引用文化の根の深さを改めて感じざるを得ない。

このように、英米の文化がすぐれて“引用文化”であることを前提として、本書では英語聖書(AV)をめぐる諸問題を、言語・文体・語彙を中心に考察したい。

[本章は講演原稿「聖書と英語文化」(東京女子大学『論集』40.1(1989)に収録)に改訂・増補を加えたものである]